
再び出逢えることを信じて...

架羅馭璃 千佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

再び出逢えることを信じて…

【Nコード】

N7198Y

【作者名】

架羅駆璃 千佳

【あらすじ】

主人公《小林つばさ》は未来からきた女の子。

つばさは大好きな《山田こうや》を死から救うため《万能薬》をもつて来た。

つばさところやが繰り広げる切ない恋物語。

作っているときに私も涙した作品です。

#1 ?サッカー?

「つばさーいったよー」
「うん」

私 《小林つばさ》 は高校2年の夏を優雅に満喫している。

私は胸まである黒いストレートの髪をしていて、二重の目をしている165ちよいの女の子。

趣味/サッカー 特技/サッカー どちらもサッカー。
私はサッカーが好き。

だけど、サッカー部に入ろうとは思わない。
本格的にしたいわけじゃなくて、サッカーは遊びのひとつとしてカウントしている。

8月7日

近所の公園で友達 《井上まこ》 《上野ふみき》 《山田こうや》 とサッカーをしている。
3人ともサッカー大好き子。

まこは、黒くて長い髪を斜めに結い上げサイドポニーテールをしていて、少し化粧をしている。

まこは私の唯一の女友達だ。

ふみきは、とてもよく似合っている坊主頭ですごく体付きがいい。
ふみきはよく気が利くやつ。
みんなは《ふみ》と呼ぶ。

こうやは男らしい短髪で、よく1人で抱え込むことがあるからやっかい。

みんなは《こう》と呼ぶ。

私はまこからもらっボールを受け取ると、そのままゴールイン。

「あーもう！ これ以上走れねー」

「はー！？ 何言ってるの？ ダラシないねー」

私はこの背中をバシッと叩いた。

「イッテー……」

こうは私が叩いた背中をさすった。

「なー。喉渴かねー？ 飲み物買ってくるけど何がいい？」

「お！ ふみ。氣い利くなー。俺、ミネラル！ いつものな」

「つばさとまこは？」

「あたしポカリ」

「私は……。行つて決める」

私は立ち上がり、ふみの隣に行った。

「一緒に来てくれるんか。サンキューな」

私たちは公園から少し離れた駄菓子屋に来ていた。

「えーっと、こうがミネラルで俺が ポカリでいいか」

「へー。ふみもポカリなんだー。私はどっちかっていうと、アクエリ派かな」

私はアクエリのペットボトルを掲げてみせた。

#2 ?恋バナ? (前書き)

セリフばかりですが、背景は自由に想像してください。

#2 ? 恋バナ?

私たちが買い物をしている頃、まことこは

「ねーこうつてさー。彼女とか作んないの？」

「は！？作る訳ねーじゃん」

「えー！なんで？」

「なんでって…。こうやって4人でサッカー出来なくなるじゃん」

「あーなるほど」

「そういうまこはどうなんだ？」

「え！あたし！？ ないないないない！！」

「え…そんなに…？」

「うん！だってあたし。正直男子とそういう関係って重いんだよね」

「あー分かる気がするー」

「まじ！？ 分かってくれる人がいてよかったよー」

「つか、俺が一生結婚できないんじゃない？」

「w w w w」

恋バナだw w w w w w

ところ变つて私とふみは駄菓子屋をでて公園に帰る途中。
買ったペットボトルを1人2つずつ持つことにした。

「なあ、つばさ。相談したいことがあるんだけどいいかな？」
「ん？どした？」

「えつとね…。俺、女子に告られたんだ」

「…」

「つばさ？」

黙りこむ私の顔を覗き込むふみ。

「告られた…？」

「うん」

「 やったじゃん！」

私はペットボトルを放り投げてふみに飛びついた。

「あ、でも俺、断わろうと思う」

「え、どうして？」

私はふみから離れペットボトルを拾った。

「だって俺に彼女ができたらつばさらと遊ぶ時間少なくなるじゃん。 それ、すっごく嫌なんだ。俺！正直、つばさ라는のすっごく楽しいから壊したくないんだ」

ふみは私に笑顔を向けた。

「ありがと！ 私もふみらといるときが一番楽しい！！」

「さっ！ 早く帰んねーとあいっすら怒るかもよ」

「うん」

私たちは公園を目指して走り出した。

こちらも恋バナでした。

#3 ? 中学生VS高校生?

「あれ？まことこうは？」

「あれじゃない？」

公園に戻ってきてまことこの姿がない。

2人は奥のグラウンドで中学生くらいの男子とサッカーをしていた。

「なーにやってんだろ。　おい。まこーこー」

ふみの声が届いたらしく、こちらを向いて手を振った。

目をそらしている間にこの足元にあったボールを中学生に取られてしまい、簡単にボールがゴールに吸い込まれていった。

「おう。遅かったじゃねーか」

「まあな」

「で、あの中学生たちは誰なの？」

私こうにミネラルを渡して言った。

「つばさらが遅いからまこと2人でパスしてたら急にあのガキ供が『俺らと勝負しようぜ』って持ちかけたから、ちと、ゲームしてたんだ」

「それってこうらが不利なんじゃね？」

「ま、いんだよ」

こうは立ち上がるとグラウンドの方へ走って行った。

どうやら中学生らと何か話しているようだ。

しばらくすると、こうが返って来た。

「おし！あのガキ供ともう1ゲームするぞ！」

「フンっ！先ほどよりかはマシか。だが！！俺たちには敵うまい！なんせ我ら京豊中サッカー部なんだからな！！」

京豊

！？

だめだ！止めなくちゃ。京豊とサッカーなんかしちゃ

！！

こうが…

こうが

！！

「さーって！第2ラウンドのはじまりだ！！」

こうが叫ぶと同時にホイッスルが鳴った。

25対31

私たち4人が圧倒的勝利に終わった。

#4 ? 癌？

「そろそろ暗くなってきたし、帰ろっか」

「おう」

私たちは家から乗って来た自転車にまたがり走り出した。

嫌な感じがする…

あの日が今日…

なら

やだやだやだやだやだ！！！！

考えたくもないよ…

そんなのやだ！！

だが、その日の夜。

山田家から私に電話がかかって来た。

『…。つばさちゃん。落ち着いてよく聞いてね。こつやが

』

私は受話器を静かに戻した。

私の瞳には涙がたまっていた。

それを見たお母さんは

「つ、つばさ！？どうしたの？」

私はお母さんの問いかけに答えることなくケータイとあるものを持って勢いよく玄関から外に飛び出した。

私はこつやママの言葉をもう一度思い出してみる。

『…。つばさちゃん。落ち着いてよく聞いてね。こうやが今、病院に運ばれたわ。こうやに絶対言っなって言われてたんだけど、こうや、《癌》なの。もう、助からないの…。お願い、こうやのそばにいてあげて。木子久病院よ』

くそっ！！

分かっていたのに…！

分かっていたのに何もできやなかった…！

私は無能だ！

どんな力を持っけていても変えてあげなきゃ意味ないじゃん！

#5 ? 交差する想い？

「あ、つばさ！」

病院にはもうまことふみが来ていた。

「まこ…。こうは！？」

「集まりましたか。それでは中へ」

医師が病室から出てきて私たちを案内してくれた。

「今はまだかろうじて意識を保っています。あとはもう時間の問題です」

「意識はあるんですね？」

「ええ」

「なら、こうは助かります」

私はみんなの耳を疑うようなことを言った。

「な、何言ってるの？ つばさ。 先生が時間の、問題だつ、て…」

「私ね、本当は未来から来たの。未来では今日、8月8日午前2時37分8秒に、こうが逝ってしまうの。私はその、そんな未来を変えるためにこっちに来たの」

私はポケットから家から持って来たあるものを取り出した。

「これはね。私がこうのために発明した薬なの。どんな病気だつてこれ1本で治るんだよ」

私はうつむいた。
分かっている。

この薬を使えば私はもうここにはいられない。

でも私はこの未来を変えると誓った。
だから

「そのあとつばさはどうなるんだ？」

ふみの声。

少し震えている。

「私は…この薬を使うと元いた世界に帰るの。これが私がやりたかったことだから。やることを果たせばここにいる必要はない」

「何ばか言ってるんだよ！つばさは俺たちに必要なんだ！　こつも…お前を必要としているんだ」

「やめ、ろ…」

弱く細い声がかすかに聞こえた。

『こつー！』

病室にいた誰もが口にした。

「俺の…た、めに…つばさが…消える、こたー、ねえ」

「やだ！私は何が何でもあんたを生かす。この液体を飲めばこつの病気は治る」

「バカヤローー！！」

こつの口から大きな声が出た。

「俺が生きたってなー、つばさがいねーんじゃ意味ねーんだよ！」

こつの息が荒い！

このままじゃ…！！

「大丈夫。私はただ元いた場所に帰るだけ。死ぬわけじゃない」

「それでも！！俺のそばにいてくんなきゃ意味ねーんだよ！知らねーだらうけどなー俺の中でつばさはいつの間にか俺の糧になっただよ！俺はつばさが好きなんだよ！！」

最後の一言。

『俺はつばさが好きなんだよ！！』

ああ。こう。

ありがとう。

今わかったよ。

私もこうが好きなんだ…。

あなたを守りたい。そばにいたい。

だけど2つ手に入れることは不可能。

だったら私は

「こう。私もこうが好き。だから…！」

私はビンのふたを開け、一気に口の中へ流し込んだ。

そして、この口へ移した。

「な…！」

移し終えた時、私は光の粒子に包まれた。

「みんな、ありがとう。また、逢おうね」

私の頬を涙が伝う。

私を包んでいた光の粒子がパンツと鳴って散った。

これでよかったんだ。

私が次に目覚めたのは元の世界だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7198y/>

再び出逢えることを信じて...

2011年11月21日16時30分発行